# 子どもたちのために、自分ができることを楽しく。

# ROAD

## 輝く人たち No.32

❶てだこまつりで披露する踊りを一生懸命練習する子どもたちと地域の皆さん ❷加藤さんの15年来のママ友であり、活動を支援する津波古さん親子 ❸遊ぶ前には必ず宿題をします ❹年の差関係なく遊ぶ子どもたち

屋富祖公民館から聞こえる子どもたちの元気な声。その中に子どもたちに交じって笑顔を見せるのは、「はっぴーていだクラブ」の会長　加藤洋子さん(49)です。放課後健全育成や地域学校協働活動など様々なボランティアの形がある中で、毎週火曜日と木曜日、屋富祖公民館を拠点にボランティアで子どもの居場所づくり活動を行っています。「部活、習い事、塾、学童など、放課後、子どもたちにとっての居場所は環境によって様々です。いろいろな居場所の中の一つとして子どもたちが安心・安全に楽しく過ごせれば」と活動への想いを語る加藤さん。

ボランティア活動をするきっかけは今から14年前、長男(現19歳)が幼稚園に上がるとき。結婚してからずっと専業主婦だった加藤さんは、長男が入園するタイミングで浦添市に引っ越してきます。当然周りに知っている人は誰もいない。「子どもはうまく学校に馴染めるだろうか」「私自身の居場所づくりをどうしよう」と考えたときに始めたのがPTA活動でした。PTA活動を通して、徐々に徐々につながりが広がっていく中で、当時の副園長からこう提案を受けます。「空いている教室を、お母さんたちが何か活動する場所、交流できる場所として活用してみませんか」と。願ってもない提案に「それじゃあ」と活動し始めたのが、「はっぴーていだクラブ」の原点となります。「家庭教育学級やこども教室の準備など、いろいろ活用させてもらいました。そこで交流したお母さんたちとは今でも交流があります。みんな悩んでいることは一緒。そういう場所があったおかげで悩みが共有でき、つながりも深くなっていきました。そこでのお母さんたちの楽しい雰囲気を見て子どもたち同士も仲良くなっていった」と当時を振り返ります。

この時をきっかけに、屋富祖子ども会での活動や次女(現13歳)が小学校を卒業するまで5年間務めた地域コーディネーターなど、ボランティア活動の幅を広げた加藤さんは、様々な場面で子どもたちやその親と関わる中で、居場所が必要な子どもたちがいることを感じ始めます。「私に何かできることはないだろうか」と思っていた時、「浦添市てだこ未来応援居場所運営事業」を知り、運営団体として活動をスタートさせます。「活動を始めて3年、子ども会活動の流れで、自分がやりたいと思ったことに賛同してくれる仲間の存在があってこそ」と色々なつながりに感謝する加藤さん。そんな加藤さんには思い描く理想があります。「私は幼い頃公民館っ子でした。家に帰っても誰もいないので、決まって行くところと言えば公民館でした。たくさんの大人がいていろいろなことを教えてくれたことを覚えています。常に気にかけてくれる人の存在がそこにはありました。今の子どもたちにとってもそういう環境は必要なのではないかと思います」。

自身が幼い時に感じた「安心感」を今の子どもたちにもと、活動する加藤さんですが、活動をやめたいと思ったこともあると吐露します。「子どもと接するにはエネルギーがいります。一人一人と向き合いたいけれど現実的には厳しい。自分がやっていることが本当に子どもたちのためになっているのだろうかと悩んだこともあります」。それでも、活動を続けて来られたのは、地域の人たちや支援者から掛けられる「いつもありがとう」という言葉でした。「いろいろな人の支えや温かさが明日への活力になるんです」と加藤さんは微笑みます。

「私はこの活動を楽しんでやっています。子どもたちも、〝加藤さん楽しそうだよね〟と言ってくるんです。大人が楽しめば子どもたちも楽しい。子どもたちを中心に地域がつながる。ここは誰もが笑顔になれる場所であり、何より私の居場所になっているんです」と、うれしそうな顔を見せながら子どもたちに目をやるその姿は優しさに溢れていました。

**PROFILE**

**加藤 洋子(49)**

屋富祖在住。
3人の子を持つお母さん。15年以上仲西小・中学校のPTAを務める。「何事も一生懸命にやる。努力は裏切らない」ということをモットーに子どもたちと接する。
蝶々が好きでオオゴマダラの生育にも力を入れる。子どもたちには蝶々のように自由に羽ばたいてほしいと願う。